

令和元年度第2回奈良県総合教育会議 =議事概要=

日時：令和元年11月9日

場所：奈良商工会議所4階中ホール

○（仮称）第2期奈良県教育振興大綱の策定について

（谷垣地域振興部次長）

<資料1「（仮称）第2期奈良県教育振興大綱」（骨子案・概要）について>

・奈良県は、教育振興に関する施策の根幹となる方針を明示し、教育現場をはじめとする関係者の理解を得ながら、効果的に教育施策を推進していくため、今般、第2期奈良県教育振興大綱を策定する。

・重点を置きたい観点については、人生のステージごとに整理し、市町村や私立学校とも一丸となったオール奈良県で、就学前教育から高等教育・社会教育に至るまで、生涯学び続けられるよう、切れ目のない教育施策を展開していきたい。

・施策を進めていく上で、県は本県の教育全体の牽引役としての役割を果たしていきたいと考えている。実施主体が議論・協働すること、また、学校・市町村・県などそれぞれの主体が各立場と役割を認識することで、より主体的・積極的に事業を遂行できるようにしたい。

・2・3ページは、直近3年間程度の社会情勢の変化、4ページからは、第1期大綱対象期間における本県教育施策の進捗状況・成果・評価分析について、5から12ページまでは、15の施策ごとに、課題や評価・分析、方向性等をまとめている。また、12ページの右側には、目指す人間像と指標を示している。13・14ページは、奈良県の今後の5年間の教育施策の方向性を示している。15から18ページには、その方向性を乳幼児期、学齢期、小・中学校、高等学校、大学、社会人・シニアのステ

ージに分け、それぞれの施策がどのステージに当たるかを図示している。

<資料2「(仮称)第2期奈良県教育振興大綱」(作成中・文案)について>

<資料1>の内容を記した教育振興大綱の作成中の文案として参考に示した。

<資料3「(仮称)第2期奈良県教育振興大綱(体系素案)」に関する市町村教委・ 公私立教職員からの意見・提案募集結果の概要について>

令和元年8月に市町村教委、公私立学校、幼稚園の全てにアンケート調査を行った結果、寄せられた意見・提案について、主立ったものをまとめている。

<資料4「令和元年度第1回奈良県総合教育会議」における主なご意見」について>

前回の奈良県総合教育会議において、この教育振興大綱の素案や課題分析についていただいた御意見をまとめている。

○荒井知事

- ・案の段階であり、まだ時間もあることなので皆様からも遠慮なく意見を賜りたい。
- ・社会情勢の変化についての資料だが、受益側と供給側に分けてつくった方がいい。
- ・課題をどのように分けるか、認識するか、それに向けて課題を克服するのが目標であるというような書き方にしたい。「～の充実」という表現よりもっと具体的な目標になればよい。

○山口教育振興課長

谷口顧問に事前に資料を見ていただいた上で、頂戴した御意見を紹介する。

- ・全体的に記載の内容は正しいと思われるし、大枠、この内容でよいのではないか。
- ・子供たちのやる気が起きるような教育が必要であり、そのために、知識から考える

こと、いわゆる思考力を養うことが大事である。その際、例えば競争的な仕掛けやゲーム感覚を取り入れるなどして意欲を高めようとするときには、教員だけでなく地域の方のボランティアや学生を加えて企画提案することも考えられる。特にICTの活用等については、学生の活用が有効ではないか。

・奈良県には多くの学習の題材があるので、子供たちが教育を通じて地域の文化等を学び、他国の方へも含めて説明できるようになると、より自信につながりもっと奈良を好きになる。普段の生活では、そのすごさ、よさに気づきにくいものである。

○谷垣地域振興部次長

続いて、松本顧問の御意見を紹介する。

- ・全体の構成としては、これでよいのではないか。
- ・子供は褒められることが一番やる気につながり、それが子供の学力やいろいろな能力を伸ばすものである。頑張っている人を伸ばす教育が大切。
- ・学校を「地域のもの」、子供を「地域の宝」とその地域の人が思って、地域ぐるみで人を育てる考え方が大切。
- ・脳の回路ができていく大切な時期における就学前教育は非常に重要であるが、この時期、最も子供に影響を与えるのは親の言動や考え方ではないかと思う。
- ・生涯教育・社会教育の分野について、社会教育関連の市民団体の、情報の共有と発信が大切。団体間の交流も生まれる。
- ・県や県教育委員会における施策の決定について、特に教育については様々な考え方や捉え方、アプローチの方法があるので、何か新規に取り組む際には、いろいろな立場の人から意見を収集するとよい。その上で、大所高所的に県全体を見渡して、国や社会情勢、長期的な視点に基づき決定し、責任をもって遂行されたい。

＜各委員からの意見＞

・地域に誇りを持つということであれば、奈良を大切に思う気持ちは、自分を大切にするという気持ちから生まれるように思う。そういう意味で、就学前教育から自尊心を育む教育を行い、年齢が上がるにつれ地元への愛情の教育へとつながるステップがあればよい。

・国際化ということについて、子供たちの知的好奇心は、例えば海外からの留学生やALTが話す英語を耳にすることで刺激を受けることもあるだろう。そこから、海外の文献等を解き明かしたいというような意欲に発展することも想像できる。

・ICTやAIに関係する教育は、現代社会に必要であり充実していくことは大変大切。しかし、一方、仮想空間ではなく、現実的な大地のぬくもりや森の温かみも大切である。ある学習を大切にすると、その逆の求めも忘れてはいけない。現実に関心を感じている五感を、小さい頃から育むことも大事にしたい。

・第1期の大綱の報告について、KPIが半分は達成されているが、横ばいのところや差が拡大している部分については、第2期においても引き続きの施策が必要。

・県教育委員会としては、今後少子高齢化の流れの中でいかに児童生徒たちを伸ばしていくかという方策を練り上げて、施策に反映させている。高校生だけでなく、小学生、中学生、幼稚園児についても減少の傾向なので、それは市町村教育委員会の所管になるのかもしれないが、対策のための予算が必要。

・国語力の低下について、奈良県の子供たちは、全国と比べて「読書を全くしない」という数値が高い状態が続いていることと無関係ではない。ハード面としての図書館、また、配架の資料においても地域格差があるように感じる。県、市町村、学校等それぞれに充実化を目指す必要がある。

・働き方改革について、教育の現場でどのように進めていくのかが課題となっている。皆で議論し、大綱の中で取り上げることは一つの発信力となる。

・小学生が観光客を案内している地域があると聞いている。今必要なのは生きた英語

だと思う。地域の文化財等を英語で紹介し、どこに行きたいか海外から来られた方を選んでもらうなど、県全体として、楽しみながら英語力や郷土を愛する心を育むような学びの仕掛けがほしい。

・「施策の方向性④大学教育の質の向上」の項目で県立大学シニアカレッジ受講者が増加しているのは、ライフステージとして自分たちが学びたいことを学ぶという時期にあるためと思われる。生き生きしたシニア世代の姿を発信することは他の世代への刺激にもなるだろう。また、他のライフステージにおいても、興味・関心の高い分野を入り口として取り組めるような教育が奈良県スタイルとしてあればよいと思う。

・「施策の方向性⑦」について、先日、沖縄首里城全焼の折、ショックのあまり登校できなかった小学生がいたというニュースを見て、強い郷土愛を感じた。奈良の国宝の数は200件を超え、全国3位である。1位は東京、2位は京都だが、建造物に関しては奈良県が1位。とはいえ、地域によって差があるので、地元の子供たちが発信し、県全体として子供たちがその素晴らしさを知るような学習ができないか。寺社の方からも子供たちへのアピールがあればよい。

<吉田教育長より>

・奈良県教育振興大綱第1期の課題としては、規範意識の高まりが十分でないことなど多数残されている。また、平成25年から小学校において国語の学力が低下傾向にあり、低位になってきているということが一番大きな課題であると認識している。

・「AI VS. 教科書が読めない子どもたち」の著者である数学者・新井紀子氏の講演をお聞きしたり、著書を拝読したりしているが、やはり読解力が大事であると主張されている。AIは「推論」を苦手としているので、推論できるような子供に育てていく必要があるが、理解する力、読解力がないと推論することはできないと述べられており、私も同感である。

また、塾では、いわゆるデジタルドリルのようなものを通して子供たちが身に付け

た基礎的な知識について、I R T（項目応答理論）を使って項目別・難易度別に測定する。しかし、その方法はあくまでも能力・知識を測るツールでしかない。同じ事を学校教育で行ったときに、デジタルドリルではよい評価の子供たちが、読解力の不足に気付かないまま成長していくのではないかと述べられていた。

・小学校における学力低下の課題については県教育委員会学校教育課が中心となり分析しているところ。「本を読むことが好き」という奈良県の子供は、全国で46位の低位にある。では、他のどのようなことに興味関心をもっているのかということについても分析をしているところ。

・本を読むことが好きな子供をしっかりと育てていくためには、市町村の教育委員会と危機感を共有する必要がある。今年度を目途として「読書活動推進計画」を策定し、子供の読解力の向上についてともに考えてまいりたい。

<荒井知事より>

・大綱の一つの目的は、課題を認識、整理して、それを体系化することにある。認識した課題を共有するときに、課題が分散しているのはよいことではない。例えば、今までの奈良県の教育における課題について、大事な、基本的なことから整理するとわかりやすい。

・基礎的な能力に課題があると認識するとして、基礎的な能力とは、学力や、K P Iにあるような学習意欲、規範意識、体力、そして統計に現れにくいコミュニケーション能力というように整理する。また、基本的な能力としての「生きる力」の不足という課題があるとすると、「生きる力」では分かりにくいので具体的には、というように整理していく。「生きる力」について考えるときには、閉じこもりや非協調というような現象に対して、「生きる意欲が不足している人がいるのではないか」というように大きな課題として捉えるという考え方もある。

・社会適応力をどのように育むかという課題もある。アンガーマネジメントやダイバ

ーシティ教育は一つの手法に過ぎない。お互いがぎくしゃくするような世の中になっている状況を教育分野の課題にするとき、例えば基礎的な能力を育むためには、コミュニケーション能力の育成を含めて、幼児期から教育を行う必要がある。課題解決の仕方を認識した上で教育振興大綱に示すようにしないと、訴える力として弱い。

・分野は違うが、受益側と供給側に分けると、供給側においては、「教員の働き方」が大きな課題のように思える。

・基礎的な力、また「生きる力」のような人間としての基本の力をどのように付けるかということについては、社会との接点の現れとともに、役立つ人に育てるという共通の課題がある。「どのように」というところから、グローバルな世界で役立つ人・ICTの社会で役立つ人・地域で役立つ人・会社で役立つ人・農業で役立つ人というふうに具体化していき、そのような場で役立つ人を育てるという教育課題があると認識すると、そのために農業大学校等様々な分野の学校を用意するということに整理されていく。他と重複しないようにパターンを成立させる。課題を認識すると、次のどうすればいいかという課題が出てきて、それを列挙すると施策になっていく。

・『『生きる意欲』を与える』ためには「社会と接するときに『生きる意欲』を醸成するようにする」というように、ライフステージの中で教育の課題を認識するとよい。社会に出る前の教育については、「キャリアアップ」「どのような分野で働くか」ということを寄り添って話し合うところに課題があると考えている。

・よい育ちをされますようにと願いを込めて周りの仕組みをつくるようにすると、人はそれぞれ違うので、生きるための課題についてのよいインスピレーションがライフステージのよいタイミングで得られるようになるのではないかな。

・教員サイドに立った表現が多いように思う。需要サイドに立って、例えば、はっきりとした生きる意欲がもてない人や、困ったことを多く抱えている人の言葉から課題を整理して、どのように克服するかを我々で考えようという表現にした方がよい。それが奈良県教育振興大綱の雰囲気になる。

